

広島県立美術館

# 研究紀要

## 第4号

船田玉樹と《水墨河童》について

—資料紹介・自作詩集『その河風をやめてくれ』『瘦河童』—

..... 永井明生 1

巖島図の振幅

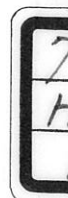
—広島県立美術館本の位置づけをめぐって— ..... 知念 理 19

イギリス時代の南 薫造..... 藤崎 綾 50 (1)

資料紹介 当館蔵(ピップ・ラウ氏旧蔵)イカット・コレクションについて (1)

—中央アジア、ウズベクの絨— ..... 福田浩子 44 (7)

2000



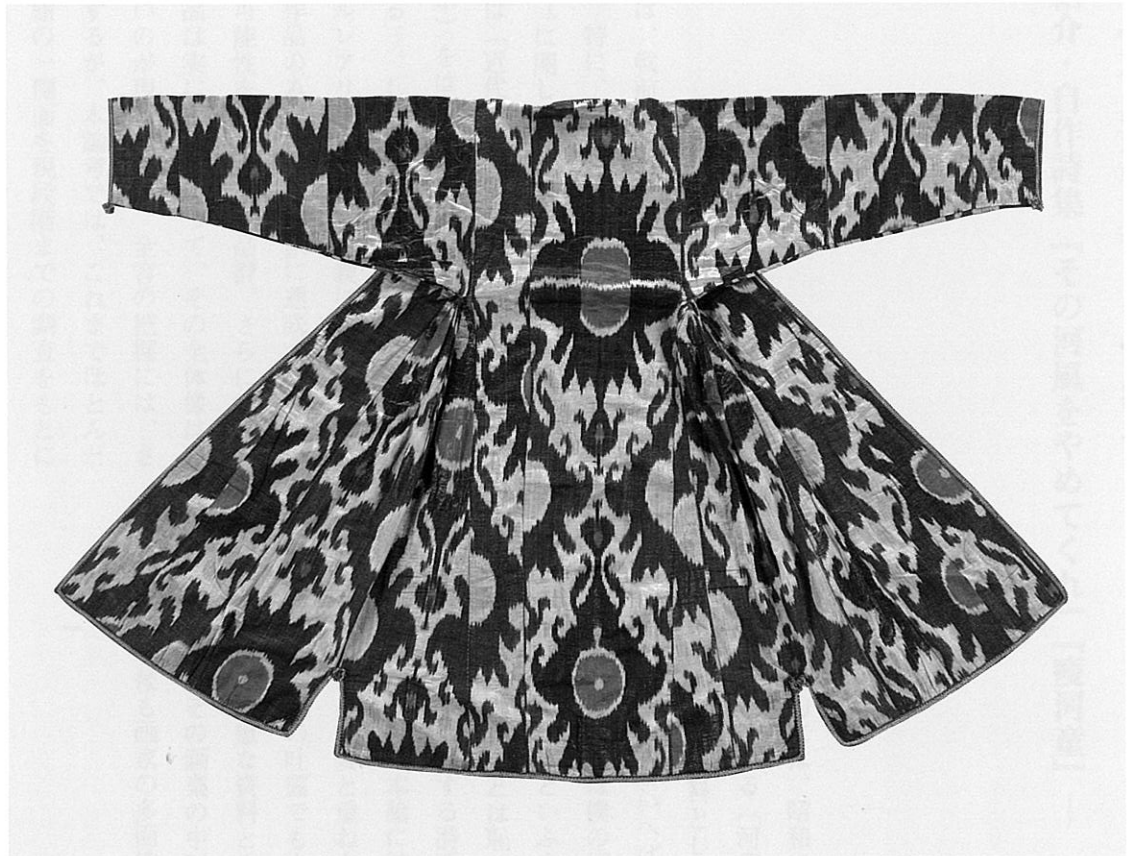
BULLETIN  
OF  
HIROSHIMA PREFECTURAL  
ART MUSEUM

No.4

2000

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM  
HIROSHIMA JAPAN

5  
B



(口絵 3) 女性用外衣 HB-46



その反面、美術館の使命のひとつである作品に関する調査研究は、収集段階においては遅れており、中央アジア現地調査を含めて、研究を進めることが急務となっていた。そのような状況下で、中央アジアの工芸作品群のうちウズベクの染織に関する概説を知るために初めに利用したのが、本稿で紹介する『絣—中央アジアの絹—ピップ・ラウ・コレクション』（Ikats: woven silks from Central Asia: the Rau collection, Basil Blackwell, Oxford 1988）であった。付け加えることになるが、当館蔵のウズベクの染織はピップ・ラウ氏の旧蔵品である。

本稿では、1988年にイギリスで開催されたピップ・ラウ・コレクション展のカタログのテキストを、今号と次号で訳して概観し、当館に所蔵しているウズベクの絣作品を紹介することを主眼におく。同展カタログでは、前半は中央アジアの略史やオアシス都市における染織業について、つまり染織品の背景について述べ、後半では生糸や絹布の生産、絣の制作など具体的な事柄について記述している。個々の問題については今後の検討の余地を残しているものの、このテキストによって作品理解に有益な歴史的背景を概観することができる。

本稿をまとめるに当たって、このコレクションを作り上げられたピップ・ラウ氏に深く敬意を表するとともに、カタログの執筆・刊行に携わったすべての方々に感謝申しあげたい。なお、内容について翻訳上の不備はすべて筆者の責任にある。また、訳者のメモはくゝで記した。

## 『絣—中央アジアの絹—ピップ・ラウ・コレクション』

### 序

本書は、ピップ・ラウ所蔵の華麗なる絣コレクションについての初めての出版物である。クラフツ・カウンシルCrafts Council主催による、2年間にわたってロンドンをはじめイギリスを巡回する展覧会に準拠するものである。クラフツ・カウンシルは主に同時代の英国工芸の振興と関係を密にしており、時には海外からの歴史的展覧会においても評価を得てきた。そういった最新の催しは、記念すべき「生産の中の芸術—ソビエトの染織品と陶磁器 1917—1935年」展であり、オックスフォード近代美術館及びソビエト連邦文部省の協力により行われた。その結果、クラフツ・カウンシルは19世紀から20世紀初頭の中央アジアの染織品を含むピップ・ラウ・コレクションを公開し、再び海外の芸術家の技を回顧する好機を得た。クラフツ・カウンシルは、ピップ・ラウ氏に大いに感謝し、イングランド及びウェールズでの数カ所の展覧会巡回を可能にするコレクションを貸与くださったことに対して御礼申しあげたい。

ラルフ・ターナー

展覧会主催者

クラフツ・カウンシル

## コレクターによる緒言

私がアフガニスタンを初めて旅したのは、1974年で、陸路でのことだった。その前年に国王はクーデターにより退位させられ、彼の従兄弟であるダウドが勢力を誇っていた。

イラン国境を越えた最初の町ヘラートまでやってきた頃には、私はすでにこの土地に魅了されてしまっていた。総じて私がかつて訪れた他のいかなる国とも異なって、ある種のタイム・ワープをしたかのごとくであった。ペルシャ人の風采をした人々のほとんどは、ただ民族衣装だけを身につけていた。そこには自動車はなく、馬車輸送だけが存在し、宿に水はなく、また町中にはスイミング・プールもなく、チャイハナ〈茶店〉にある唯一の「いける」食物といえば、大きいカバブ（串焼き肉）と小さいカバブで、幸運ならばときにはヨーグルトにありつくことができた。

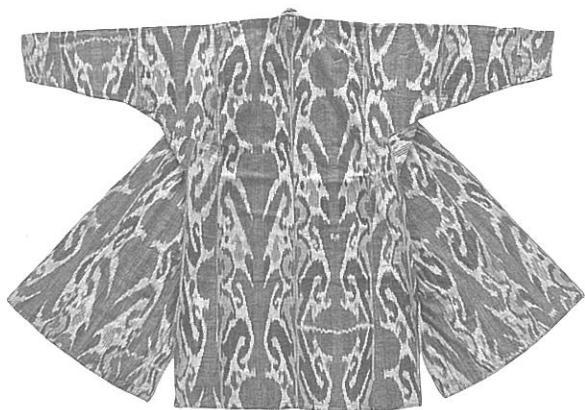


図2 男性用外衣（チャパン）HB-48

その初めての旅の魔法は私を魅きつけ、もっと時を過ごしたい、アフガニスタンについて調査したいと思わせた。

1976年、私はカブールへ飛んだ。そこはヘラートほど絵のような美しさを持つわけではなかったが、はるかに西洋化されており、確かに快適であった。人々の顔つきは、多くの違った民族のもの—ウズベク人、ハザラ人、トルクメン人、タジク人、パターン人〈パシュトゥーン人〉であって、大いなる喧騒と興奮がいたるところにあった。その後のいくたびもの旅を経た後、アフ

ガン人は彼らの自尊心、ユーモア、気品、そして親切さを彼ら自身の内に確固として持っていることに気づいた。

1976年に、私は初めて絣を見、そして購入した。その美しさ、色彩の豊かさ、そしてデザインのヴァリエティに仰天した。この旅で二、三枚を自分のものとしたが、その後数回の旅を重ねてはじめて、やっと本気で絣を集めることを決心したのだった。

1978年11月カブールで、幸運なことにも20枚ほどの驚嘆すべきチャパン〈男性用のコート〉と壁掛けを最近入手したディーラーを見いだした。さらに幸運なことには、街にはそれらを見たことのある西洋人は他にはいなかった。この時の絣は私のコレクションの基礎となった。以前に一度だけ、偶然に最上級の品を見たことがある。1979年のソビエト侵攻〈アフガニスタンへの〉以降、ソビエト国境を越えて優品がカブールのバザールへ入ってくるようになった。

私は包括的なコレクションを持つことは不可能であると、早い時期に悟っていた。一世紀以上にわたって、新しいデザインが流行に応じて年々現れてきたし、それぞれのデザインを生み出すギルドや工房がいくつもの街々にあった。コー



図3 男性用ベルト

トには五、六種類の形式しかないが、それが流行の要素を創りだし、また、絣のデザインは着用する者の生活における地位を左右した。色彩もまた意味深い働きをする。例えば、ユダヤ人は屋外では、ある限られた色彩だけを身につけることを許された。ある人物は厳しく罰せられたに等しい者たちよりも高い階級を示すチャパンを着ることを認められた。

中央アジア社会の別な局面は、着装にも反映されている。プハラでは、例えば、男性は祈るために膝をつく間、チャパンを締めるためにベルトを帯びる。一方、サマルカンドや他の街ではチャパンには紐が縫いつけられている。既婚女性の衣服には乳を与えることができるように胸の部分に深いスリットが入れられているが、未婚女性の衣服には首の部分に短いスリットがあり、ボタンで閉じるようになっている。

今日のウズベキスタンでは、婦人たちは依然として絣の衣服を着用しているが、織物としては変化が現れてきている。裁断はヨーク、襟、そして短い袖（イスラムとは異質のもの）というように同じで、時折、絣のズボンがスカートの裾下に見え隠れしている。アフガニスタンでは男性は肩の上から今も変わらずチャパンを着ているが、その布は機械織りで、デザインはともすると縞柄である。

中央アジアのすべての染織芸術において、私がかつとも興奮を覚えるのは絣である。きらめく色彩と並外れたデザインはしばしば現代絵画を彷彿とさせる。使われている多くのモチーフは、花、果実、動物や彼らが日常生活の中で目にするもののイメージから生まれた。中央アジアにあふれる色彩はまさに息もつかんばかりのものである。

数限りない出版物、そのほとんどはロシア語からのものであったが、その文献調査に時を費やしてくださったアンディ・ホールとケイト・フィッツ・ギボン、計り知れない編集協力をしてくださったステイヴン・コーヘン、とりわけこの本と展覧会に情熱と援助を注いでくださったデイヴィッド・キングに厚く御礼申しあげたい。

ピップ・ラウ

## 概 説

### 絣とは何か？

アブルー＝ペルシア語で「雲」を意味する一は、中央アジアのもっとも格調高い美しい織物を示す伝統的な名前としても転用されている。アラビア語でアサブ $asab$ 、トルコ語でイパックスシャヒ $ipekshahi$ 、ヒンズー語でパトラ $patola$ としても知られているが、おそらく西洋人の間ではマレー半島の同様な絣がより親しまれているだろう。雲のような文様の一単位には制限がなく、中央アジアの絣は素材のいくつかの組み合わせで構成され、また単純かつ複雑な構造に織られていて、大いに変化に富んだパターンを示している。

しかしながら、これら一風変わった染織品に共通するひとつの特色は、個々の要素が織機のうえに準備される前に施される複雑な染色の工程にある。すべての絣布には、糸が織機にかけられる前に選択された部分だけを染め分けた経糸もしくは緯糸、あるいは（稀なケースであるが）経糸と緯糸がある。経糸か緯糸のすべてに染料が染み込むのを防ぐ工程は「防染法」として知られており、これが絣



布の本質的な特徴を作り出している。染め残された（防染された）部分が染めた部分と接する（またはひとつの色が別の色と接するところ）間際で数多くの色彩が別の色に溶けこみ、不規則でとらえどころのない、わずかにかすれた文様となるように注意深く調整される。この染色法はそれぞれの緋を確実に独特のものとするのである。各々の曖昧な部分の組み合わせは別の色とわずかずつ異なっているので、雲との類似を連想させるのも頷かれよう。

### 中央アジアの初期絹技術革新を想起させる考古学的証拠

絹の断片についての考古学的資料は、中央アジアのいくつかの地点に現存している。おそらくもっとも重要な例は、紀元前約1500年のサパリ・テペSapalli Tepe遺跡で発見された絹の衣服であろう。他の数多くの素晴らしい例は、20世紀初頭にオーレル・スタイン卿Sir Aurel Steinによって見いだされており、彼は中央アジア東部のいにしへの廃墟〈楼蘭〉を発掘した。西洋の博物館には、今日一般的に中央アジア起源と見なされる中世の模様をついたかなりしっかりした絹錦も存在している。しかしながら、中央アジアで発見されたといっても、それらの織物の裂の多くは中国、インドやイランからの輸入品であることがよくあり、それゆえ中央アジアでの生産を確証するものとはいえない。さらに、これらの織物には緋に染めたものはない。実際、中央アジアの緋は18世紀後期以前のものとして積極的に年代特定できるものは現段階では存在しない。しかし、だからといってこの物的証拠の欠如が18世紀以前の緋生産の仮説を阻むものとはいえないのだ。

### シルクロード

1000年の長きにわたって—16世紀初頭にポルトガル人がより競争力のある海路を再発見するまで—ほとんどの交易品は東アジアと地中海との間を名高い「シルク・ロード」を陸路輸送されていた。また別のルートは中国を横切り、無数のキャラヴァンの足跡はイラン国境で分岐していたが、中国北部とホラーサーン地方〈現在のイラン東部からトルクメニスタン西部にかけての広範囲を指す〉の間で、「道」のすべての枝は中央アジアに点在するオアシス都市へむけて集約されていた。ブハラBokhara、サマルカンドSamarkand、メルヴMerv、ヒヴァKhiva、フェルガナFerghana、カシュガルKashgar、ヤルカンドYarkandなどの安全な休息所の名声と実に巨大な富は、その領域を通過して旅する商人や冒険者への世話にほとんど依存していたのである。

「シルク・ロード」という表現は、中央アジアに関してある意味を付加するものといえる。その経済において第二の重要な特徴は、養蚕を伴うことである。中国やインドから絹が持ちわたられたにせよ、後世になって土地産の絹が生産されたにせよ、中央アジアに関する最初期の歴史的記述の多くが絹交易との関連に触れている。7世紀にアラブ人がイスラム教を中央アジアにもたらしたとき、彼らはすでに絹布がブハラBokhara近郊の小さな工房で作られていたと記し、また、670年頃—684年のコインから「Khatun（トルコ語で女王）」の称号によってのみ知られる摂政女王による礼服（アラビア語でヒラットKhil'at）の流通の証言に意味ありげに触れている。他の資料では、『ムジールエッディーン的年代記Chronicles of Moujir-ed-din』は、7世紀のイェルサレムの岩のドームの落成式について述べ、ヘラ



ートHeratとムールMerou（メルヴMerv）から来た絹を着用した式参列者について語っている。古くに散逸した記録によっているものの、この年譜は15世紀のものであり、中央アジアの絹生産について、アラブ人が高い関心を持っていたことは極めて重要である。

## 中世

中世を通じて、絹交易は政治権力の興亡に応じて拡張と縮小を繰り返し、平和を維持するに足る「シルク・ロード」の終焉まで続いた。古くは、ササン朝ペルシャとローマ帝国は商人に通行手形を与えたが、ローマの衰弱とアラブ人によるササン朝の敗北とにより、混沌の世界となってしまった。ビザンチン帝国の新興と西アジアのアッバース朝カリフ、そして中国の唐帝国は、中央アジアを通過してイランや小アジアへ移動したトルコ系遊牧民が再び戻ってくるまでの間、かつての貿易を回復させた。そして再び、13世紀のモンゴル侵攻間の衰微の後、今や西アジア（イル汗国）や中国元朝に腰を据えたモンゴル人によって進められた精力的な貿易の時代がやってくるのである。イル汗国、その後は14-15世紀にそのモンゴル帝国の後継者たるティムール帝国の保護のもと、中央アジアは東イスラム世界の科学的、文化的、芸術的中心のひとつとなっていた。ティムールはサマルカンドに彼の帝都を建設し、捕虜となった職人や名工たちに都への定住を強いた。しかしながら、ティムール帝国も全盛期を迎えた16世紀初頭、ウズベク人のシャイバーニ朝によって東イランおよび中央アジアは取って代わられるのである。中央アジアの歴史的発展における新局面が展開していた。ウズベク人は19世紀末まで地域政治に主要な地位を占めていたが、インド経由のより競争の激しい海上ルートの発達のためにオアシス都市の経済的重要性は確実に衰えを見せていた。

### ウズベク人優勢期

#### 18-19世紀中央アジアの文化的歴史的背景

18世紀の政治的混沌から3つの強力な支配一族が現れた—ブハラのマングト朝Mangitブハラ=ハン国Bokhara Khanate、フェルガナ地方Ferghanaのコーカンド=ハン国Kokand Khanate、ホレズム地方Khorosmiaのヒヴァ=ハン国Khivan Khanateである。ハン国は多民族国家であって、それぞれは言語や文化の障害によって内分されていた。北方の領土はウズベク人バクBugs（トルコ語で皇子）の治める半独立公国に分割されていた。ウズベク人とタジク人（ペルシャ系民族）農民たちは市場都市へ生産物を供給し、18世紀ごろには、綿花のような非食用現金収入を可能とする地方産業向け農作物の生産が著しく伸びた。カザフ遊牧民はハン国の北方国境に居住し、家畜の群れとともにステップを越えて広範囲にわたる移住を行った。キルギスの羊や馬の畜産家は東方の高山で遊牧をした。中央アジアのアラブ人は、オアシス渓谷の上部で農耕を伴う田園遊牧を交代で行った。トルクメン人はハン国の経済活動に積極的で重要な役割を果たした。彼らは西方の砂漠に駱駝と馬の巨大な群れを調達したが、その主な収入源はペルシャ国境の街に対する襲撃で得た奴隷の売却であった。残酷な貿易は大都市にオアシスの土地の集約的灌漑農法に必要な労働力を供給した。

19世紀は、中央アジアに政治と文化を喚起した時代となった。もはや国際貿易の十字路あるいは遠

い文化が会う場所ではなく、再生には内部観察が必要だった。活気のある経済は公的事業、都市内ギルドと工芸組織の再興、新たなモスクやマドラサ（トルコ語で中等学校）の建設を許容した。とりわけブハラは神学研究に卓越していたが、エミール〈領主〉たちは近代教育への非伝統的知的思考と努力に対しては、大いに疑念を持って注視していた。外国人嫌いと宗教的狂信は、ハン〈王〉たちによって政治理由のために第一に進められた。

芸術と哲学の代わりに、ハンたちは豪華と壮麗を宮廷に求めた。オアシス都市中、最大でもっとも豊かなブハラで

は、中央アジアの絹生産の拠点として、ある意味で似つかわしい名声を勝ち得ていた。権力と富、そしてエミールの宮廷の威信の最も重要なシンボルは、軍備と着衣にこそ見いだされるべきであった。

アンリ・モザーHenri Moserは、1882—83年にウィットゲンスタインWittgenstein公の大使とともに旅行したが、位順に宮廷役人たちが並ぶ広間を抜けて、エミールの住居へ入っていったことについて述べている。彼らの衣はまったく同じ寸法であり、同じような裁断をしてあるが、選択する織物によって彼らの身分を示してある。ある低い階級のものはアトラスadras（絹の経糸で、綿の緯糸が隠された織物）とカナウスkanaous（ペルシャ起源のロシア人の意：密に織られた総絹の織物<sup>4</sup>）の緋を身につけ、次の階級はサテン、ヴェルヴェットやカシミールの金襴をまとう。最上級の者は金糸刺繍を施したヴェルヴェットにカシミールのショールを巻きつける。部屋の調度もまた織物で、絨毯やクッションがある。もっとも豪華な内部の室はエミールが大使を招き入れる部屋であるが、そこには原産のトルクメンの敷物よりも一層高価な輸入物のベルギー絨毯が敷かれていた。

当然のこととして、大使はエミールから贈り物を賜った。モザーは代表団の正式なメンバーではなかったけれども、公の客人であるというだけでエミールから1頭の馬と10枚の礼服（ウズベク語でハラトkhalats、アラビア語起源khil'at）〈ロシア語でもハラト〉を受け取った。たった二、三週間のブハラ訪問で、モザーは諸官吏から贈り物として140枚の衣を贈られたのであった。彼は、毎日のように大使館構内に現れる商人たちに衣を販売するビジネスについて書いている。彼らは贈り物を買取り、市場へそれを戻すのだ。彼の贈り物の裏地の押印の置き方から、モザーは数人の購買者たちが衣服の元の所有者のために働いていることを突きとめた。これはまったく単独の出来事ではなかった。彼は2度目の訪問の際も同様の贈り物を受け取った。

衣は客人へ贈られるだけのものではなかった。それはまた、労働に対する支払いにも用いられた。最も裕福な統治者が従う慣習では、エミールたちは新年ごとに宮廷のメンバーひとりひとりに衣服一揃いサロパsar-o-pa（頭から足まで）を与える。1863年のヒヴァ＝ハン国の宮廷では、アルミニウス・ヴァンベリーArminius Vamberyは尋常でない取引を目撃している。ハンの軍勢から帰還したトルクメン人傭兵は討ち取った敵の首級を大きな袋に入れて背負っていた。首級を地面へ落とすと、トルクメン人へ領収書を出した売りが首の数を数えた。そして宮殿の収入役が記入したさまざまな種類の絹

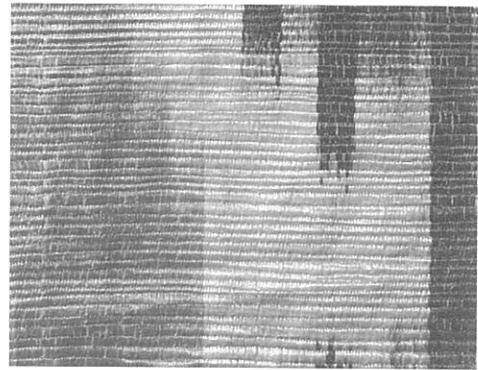


図4 女性用外衣（ハラト）（部分）HB-46  
アトラスの例 絹の経緋、緯糸は木綿である  
口絵3に全図

の衣と引き替えるのである。それは織物の品質によって違い、4頭、12頭、20頭、40頭と示してある。

遊牧民族は、着衣に関してオアシス都市の人々よりもはるかに自由を許されていた。オアシスでは、衣服からその人を知ることが容易であった。慣習法（アダブadab）は身なりに厳しく適用されていた。丁度、宮廷のさまざまな官僚が自分たちの地位に適った織物を着用するように、普通の住民たちは不文律に従って衣服を身につけたのである。不適当な衣を着ている異端者は即座に打ちのめされるか、ときには逮捕されることさえあった。

18—19世紀の間、ブハラは中央アジアで最も豊かで最も活発な貿易拠点であった。ブハラを取り巻く田舎の村々の退屈さと比較して輝くばかりであり、その富と雇用の機会は全中央アジアから商人や芸術家を誘った。一方、サマルカンドSamarkand、マルギランMargellan、カルシKarshi、そしてフェルガナFerghana溪谷のいずれの地域も絹緞を生産しており、20世紀初頭にこれらの拠点は、独自の見事な織物生産の源としてしばしばブハラやブハラの移住者たちを指し示すと見なされている。この都市の記述はハン国全体の一例として役立つことだろう。

## ブハラ

### 住民の民族混合

#### タジク人

人口に最大の比率を占めるのはタジク人（ペルシャ系のスンニ派ムスリム）である。遡る1500年間のほとんどをさまざまなトルコ民族やモンゴル民族の法のもとに従属してきたけれども、タジク人はそのハン国の最も古くからの住民であることを決して忘れてはいない。彼らは自らをウズベク人統治者よりも器用さにおいてはるかに勝っていると見なしており、舞台裏から国を動かすことを指向した。タジク人は裁判官、官僚、豪族たちの助言者として高い地位に登る一方で、貧しいタジク人は小規模地主や店舗所有者、商人、職人であった。

#### ウズベク人

当時のヨーロッパ人記者によればと、前置きするが、ウズベク人はオアシスの征服者の後裔であり、タジク人を軽蔑しており、彼らを怠惰で、臆病で、慢心で、どの点からみても道徳的に墮落していると見なしていたという。タジク人とは違って、ウズベク人は遊牧とともに親族関係の絆を礼儀に適った観念として持ち続けており、自分たちをある特定部族集団の後裔であると認識していた。実際、成人のウズベク人の生活はタジク人とは少々異なっており、ふたつの集団がしばしば婚姻関係を持った。ウズベク人は織りや刺繍といった工芸を含む職業のそれぞれの段階に見いだされる。

#### イラン人

ブハラ＝ハン国への最近の移住者で最も重要な集団はメルヴ人とイラン人であった。スンニ派メルヴ人の大半は、1785年のブハラ＝ハン国君主マースム・シャー・ムラードによる彼らの都市の侵略後、ブハラとサマルカンドに居住するよう強要された。彼らは常に職人、しばしば絹織物職人として認識

されている。メルヴ人にサマルカンド及びブハラの絹産業復興の名誉を与えるような情報も存在する。イラン人と後のファルシはその名をシーア派ペルシア人奴隷やそれら奴隷の後裔から付けられた。解放に先立って、彼らは第一に農業に従事したが、多くの者は職人や織工として熟練していた。19世紀末までに相当数の解放奴隷がブハラへ移住し、その都市人口の半数以上を占めた。そのために、ほとんどは織物貿易に巻き込まれることとなった。

### ユダヤ人

現在のユダヤ人社会は14世紀後期に築かれたものであるが、遡れば紀元500年ごろにユダヤ人数家族がペルシャからブハラへ連れてこられた。面倒な課税や大きな差別をものともせず、多くのブハラのユダヤ人は金融や卸貿易活動を通じて巨万の富を作りあげた。彼らの容姿はその裕福さをいや増した、というのは、ユダヤ人の衣服は慣習法のもとで大変制限されていたのである。大抵のブハラ人のように彼らの頭は剃られていたが、2本の長い前髪を生やしてアストラカンの毛皮でできた角張った帽子をのせていた。彼らは絹の着用を許されておらず、裕福なブハラ人たちに好まれていた典型的な手の込んだ仕上げの銀製ベルトのかわりに縄を使った。その謙虚な容姿は、家の中での衣装とは著しいコントラストを見せていた。ユダヤ人の家庭やシナゴークの学校で撮影された19世紀の肖像写真はほとんどすべてが絹を身につけた男性、女性、そして子供たちを示してくれる。豪華な宝石やベルトもまた多く見受けられる。

### ムスリム改宗者、Chala

ブハラの少数民族で最もみずぼらしいのは、chalaあるいはムスリムのユダヤ人であった。もし、あるユダヤ人が罪を負ったときは一珍しいことではないが—彼は信用を放棄することで主な懲罰を免れることができた。この選択権によって死を免れることを選んだユダヤ人はしばしば妻たちや家族たちから絶縁された。しかしながら、多くのchalaは伝統的なユダヤ人の職業に就いたままである。藍染と生糸の紡績はしばしば彼らの仕事であった。

### ブハラのバザール

都市のバザール（市場）はバベルの塔のようなものであったに違いない。こちらにキルギス人がいれば、あちらからカザフ遊牧民が狭い通りを抜けて羊や山羊の群を連れてくる。フェルト帽と刺繍のある革の乗馬服を着た男たちがポニーに跨ったまま、品物を吟味する。ヴェイルを被っていない彼らの妻たちは商人たちとキルギスのフェルトや馬具の商談をする。トルクメン人が快活に馬に乗って、馬の後ろをよろめきながらついてくる手枷をはめたペルシャ人奴隷を連れて街を歩いてゆく。ペルシャ人、ロシア人そしてその他の捕虜にされた不幸な者たちはレギスタンの大広場近くにあるチョルスのキャラヴァンサライ（隊商宿）に連れてゆかれ、そこでは毎土曜日に奴隷市が開かれるのだった。バザールでは、奴隷は頭を指4本の幅で剃られていることからそれとわかる。男の奴隷は銀製のイヤリングを、女の奴隷は鼻輪をつけられている。浅黒いひげ面のアラブ人は革を分類したカラクール羊の

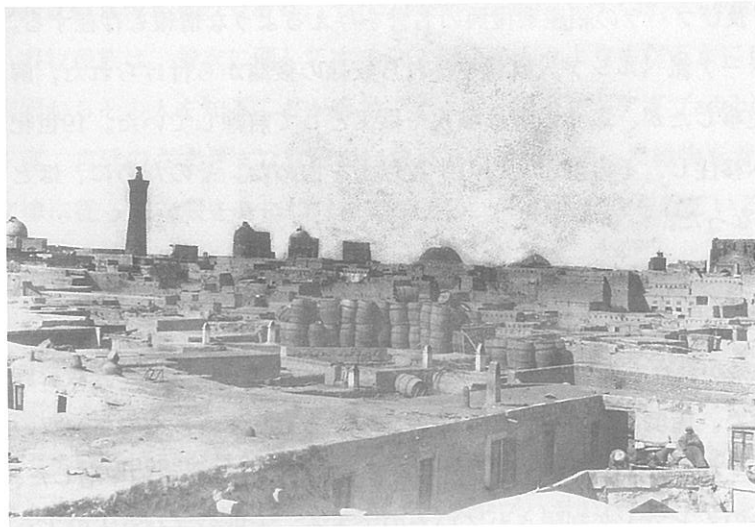


図5 キャラヴァンサライの屋上から見たブハラ城内  
アンリ・モーザー 1889-89年 Bernisches Historisches Museum 蔵

バザールの中を歩く。綿と絹の縞模様の衣をまとったウズベク人やタジク人たちは商品の在庫をおいた仕切のある小部屋に座っている。長髪のアフガン人たちはキャラヴァンサライの卸市場向けの、布や染料の包み、インド産の薬物を売り払う。ヒンズー教徒は、その独特のカーストの印とゆるやかな衣服を身につけているが、コインを重ねて防護している。非ムスリムとして、ヒンズー教徒とユダヤ人はバザールの金貸しである。

バザールの間中、すべての通りのプリキ職人が同時に槌を打ち、刺繍職人が針を刺し、吹玉をかけて血管から血を抜き、行商人が菓子を売り歩き、手品師が宙返りをし、火術師がたいまつを振り回し、ムスリム修道僧が布施を受け取っては恵みを施与するのだ。

都市の社会的・商業的生命の双方がバザールの中央を占めている。閑静な一角、しばしばモスクの中庭の陰の傍らでは、商店主やそのパトロンたちがチャイハナ（茶店）に集まっている。彼らは熱い湯とティー・ポットの使用权を持ち主から買う。そして飾り帯にぶら下げた小さな鞆に入った自分の茶を持ち歩くのが慣習である。友人、仕事上の同僚、そして手工業ギルドはそれぞれが特定のチャイハナの常連であった。彼らは時として少年の踊り子を扶養しておいておくことがあった。Bachchaと呼ばれる彼らは長い髪をして女性用の衣服を着たハンサムでひげのない若者である。彼は手拍子とドラムに合わせて一初めはゆっくりと、そして熱狂的に回転しながら一踊り、愛や金のために男から男へと移っていくのである。

#### 地区内の手工業組織

ブハラの宮殿と大広場を取り巻く街路の迷路のようなネットワークは、12の町と200以上の地区とに分けられていた。その区域は人口の増加に伴い数百年以上にわたって都市に加えられてきた。これらは、最終的にはかつて郊外にあって、城壁の拡張を必要としていた別荘や庭園を合併した。バザールは都市のいたるところに四散しており、しばしば職人たちが住む地区のメイン・ストリートに位置していた。社会生活や共同体の基本が、相互援助の地区責任にあるということは明らかであり、それは水管理システムの維持共用であって、とりわけもてなしという伝統的慣行の延長線上にあった。もし、徒弟ギルドの寄宿舎がある特定の地区に位置していれば、徒弟たちにとって、その地域の家庭の祝典に加わることは当然のことなのである。また、彼らは敵対する地区や手工業組織との抗争を演じる役割を果たした。地区の境界は家々の裏壁に沿って、というよりむしろ街路に沿って走っていた。



19世紀までに、織物生産は高度に専門化された手工業が地区や町の境界からあふれる程度にまで成長してきていた。そこには52の地区があり、織ることは仕事として優勢を占めていて、地区名はしばしば織物工業と関係を持っていた。Sheikh Rangres（ペルシャ語rangは色彩）、立派な染色職人の地区は、ある奇跡を成し遂げたスーフィーの聖人から名付けられた。その奇跡とは、彼がまだ染められていない3束の枷をきれいな水の中へ浸し、引き上げると3色に染まっていたというものであった。他には、カルハナKarkhana（ペルシャ語で工房）と呼ばれるのは、絹織物職人の守護聖人であるユースフ・ハマダニYusuf Hamadaniの墓に関連がある。個々の織物職人はその地区に位置するモスクへ供物を捧げる。またその地区の地下水組織のさらに地下には、幻の織物職人がいる目に見えない工房があるとされている。

### ブハラジュイバルDjuibar地区を例に

#### スンニ派、シーア派、タジク人、ウズベク人そしてユダヤ人間の手工業協同組合

ブハラのある地区の例は、絹織物貿易における労働分配の複雑性を説明することだろう。ジュイバルDjuibarは、織ることが普通の職業である地区のひとつであった。19世紀末（相当に詳細がわかる記録が利用できる）、ジュイバルの20区域の多くは奴隷かメルヴからの移住者の子孫であるシーア派イラン人とスンニ派ペルシャ人で占められていた。双方のグループは緞のような絹織物を織ることを専門にしていた。ウズベクの後裔を自認する非移住民の「古ブハラ人」はウズベク人とイラン人が服従させた地区に住み、純絹と半絹両方の緞を織った。タジク人地区にも経緞を生産するアブル・バンディつまり緞織工房があった。数多くの純絹緞織物職人たちを含むほとんどのタジク人とペルシャ人が非常に入り交じった地区では、ユダヤ人と非ユダヤ人染色職人を雇う染色施設が存在した。絹織りだけでなく、半絹や純絹緞生産さえも、ある単独民族集団に限定されていなかったようである。明らかに、この詳細な情報は比較的后期にのみ利用でき、ごく近年になって職業選択の自由が認められたペルシャ人奴隷たちの労働力を含むものである。

分析においては、都市規模のわずかな職業的傾向が特筆されるだろう。ウズベク人の後裔の織物職人は綿の緯糸を使う半絹織物を生産する傾向があった。それらは自らタジク人や「古ブハラ人」と称する織物職人が行った。イラン人とペルシャ人は正絹織物の織物職人により多く見受けられるようである。ユダヤ人とムスリム・ユダヤ人織物職人はとりわけ軽く薄い、上質のスカーフやショール（gal-ghai）によって特徴づけられていた。

### 染色職人

#### ユダヤ人の独占領域であるか？

8つの緞工房の成立に言及するのであるが、それらの場所は4カ所しか与えられていない。2つはタジク人地区で、残りの2つはペルシャ人地区である。このことは相当複雑なことを示している。つまり、伝統的に数多くのユダヤ人施設や工房がユダヤ人地区外に位置していたということである。藍に従事する染色職人は例外なくユダヤ人かムスリム・ユダヤ人であった。この概説に述べるすべての熟を使

用する〈藍染め以外の〉染色職人はタジク人であった。

現存する記録の分析から導きだせる結果はまだ十分に理解されておらず、一般に受け入れられる仮説と矛盾するものである。19世紀のヨーロッパ人記録者たちは、ブハラの織物貿易について異なった意見を記しているが、すべての絹貿易と染色業はユダヤ人の手に握られていたと明言している。藍や紫色を扱う染色職人はたやすく見分けることができる。染色に従事する者はその手に目立つものがあるからだ。藍染めはしばしば絶妙な手の動きを要求するし、藍は皮膚に対して厳しい染料である。

すべてではないにしても、ほとんどの卸貿易はユダヤ人によって統制されていたようである。19世紀のブハラでは、ユダヤ人が最初にロシアと貿易を始め、綿織物に加えてヨーロッパやロシアの絹の輸入を開始した。19世紀第4四半期には、輸入物の綿布が市場での多くの地方産中級織物の地位を侵害した。ユダヤ人がこれら輸入品を独占し、絹を輸出したからという可能性がある。

### 織物職人組合の役割

絣や他の特殊な絹を制作するブハラの小工房は、織物職人組合の管理下で運営されていた。その組合はたいへん大きく、専門的織物への別々の部門 (jaribs) に分かれていた。組合には3つの主な職務があった。

- 1) 徒弟の利益を守ること。
- 2) バザールでの流通と価格を調整すること。
- 3) 礼拝活動の習慣を通じて、聖なる守護者による組合の保護の継続を確実にすること。

通常、ひとつの工房はひとりの親方職人 (ustad-kar) と、二、三人の徒弟 (halfa) で成り立っていた。徒弟はたいていは親方の家に住み込み、その家族と食事を共にしていた。彼らは選ばれた組合長の直接保護下にあった。この責務は厳粛に執り行われ、徒弟を虐待した親方の店に自ら鍵を取りつけ、ボイコットを命じた組合長の記録が残っている。

非常に多くの家内織物職人 harchibaft は、原則的に自分の織機で親方職人のために請け負っていた。彼らは組合の保護を受けず、それゆえ徒弟ほどうまくはいかなかった。自分の生糸を所有し、組合外で働く自営織物職人もまた苦しんだ。というのは、彼らには彼らの商品の市場価格の統制がなかったからである。組合は、組合を通じて職を探す他の都市からの織物工のための寄宿舎 (taquiya) をも備え付けることができた。

高級商品を保証するため、バザールを監視する組合長老は定価を申し出る。彼は仲買人としても働き、織工と卸商人との間で販売交渉を行った。3人目の職員 (golib) は、組合の教養あるメンバーから選ばれた。彼の責任は組合のしきたりを維持し、宗教的儀式を執行することにあった。

### 組合の礼拝活動

リソラ risora は、一連の規則よりも、組合の聖なる歴史にはるかに密接して一致していた。織物職人のリソラは口述の伝統に起源をもつと思われる伝承を記述編纂したもので、他に流布している物語と



同様の方法で編集・粉飾されていた。書かれたリソラは性格においては際だってイスラム的であるが、いくつかの物語においては、イスラムの粉飾をより古い話に明らかに被せたものである。例えば、織物の創始者であるシシ・ナビShishi Nabiという、イヴの助けなしにアダムの種から生まれたどちらかといえば個性のない老人がいる。彼はハズラチ・ボールという山羊の古い祖先崇拝から知られるより活動的な人物によって補われていて、動物の毛を組み合わせた山羊の角を持っていた。記述された唯一の女性は紡績の守護者ビビ・リサンドBibi Risandである。ブハラの絹織物工のリソラは絹の不思議な起源について詳細に触れている。

「神の名によって大天使ガブリエルがヨブ病人のもとへ遣わされた。というのは彼の身体が虫に覆われていたからである。しかし辛抱強いヨブはその場にじっと待っていて、神を褒め称えていたのだ。大天使ガブリエルは、予言者ヨブを水の中へ投げ込むように命じられ・・・その結果、彼の腐った部分は元通り無傷に戻った。ヨブの身体にたかっていた虫たちはそこにあった桑の木に這い上がり、その葉を食べ始め、その後、自分で覆いを作り、中に閉じこもった。彼らが残したものは今でいうところの繭と呼ばれるものである。」

疑うことなく、リソラ以外の、現在多くの口述伝承のなかには魔の働きを認めることができる。シャイタンShaitanは数多くの小さいが機転の利いた技術革新に功績があり、いかなる手工業も彼無しでは発展しなかったと考えられている。彼の賢明さゆえに織物職人の報酬の部分に名を付けられている。この支払いはハハシュアストkha-khash-astと呼ばれているが、どのようにして魔がその報いを受けることになったのかを示す記録はない。伝統的な見解としては、リソラと口述の歴史の双方において、手工業は魔術的もしくは霊的構成要素を持っていると言われている。織物職人組合においては、仕事の工程は魔術的でもあり、そしてその結果は人間の力以上のものに依っていると考えられているのだ。

(続く)

(ふくだひろこ／当館学芸員)

広島県立美術館 研究紀要 第4号  
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.4

発行日 2000年3月22日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22

2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel.082-221-6246 Fax.082-223-1444

印刷 有限会社 清弘社

〒730-0802 広島市中区本川町2丁目3-8

Tel.082-232-3251 Fax.082-231-9601